

中国問題の大きさ

中国経済の減速が世界経済に衝撃をもたらすのは、その規模があまりにも大きいからである。資源価格の下落、工業品の供給力過剰からくるデフレ圧力、世界最大の借り手としての金融不安など、その広がりも大きい。

中国の鉱工業生産額は、2004年に日本を、08年には米国を超え、直近では中国が4330億ドル(2000年価格、世界銀行)と米国(2470億ドル)や日本(1260億ドル)を大きく上回る。世界の生産額は過去11年間で年率3.4%増加したが、中国は14%増え、世界全体の成長の3分の2を支えた。

中国の鉄鉱石需要が世界の66%、銅が44%といわれるように、資源消費においても圧倒的な大きさを占めている。今世紀に入ってから巨額の投資の結果だが、この投資が世界的な過剰供給力となって、世界経済にデフレ圧力を投げかけ、工業化を進めてきた途上国のみならず、先進国にとっても深刻な問題を生み出している。

このような中国の高成長を支えてきたのは国内貯蓄と直接投資を中心とした外資の流入だが、この金融面でも変調が見られ始めている。まず、国内貯蓄を反映する経常黒字が急減している。08年の4210億ドル(国内総生産比9.3%)から昨年は1890億ドル(2.1%)となった。さらに、香港向け輸出の過大計上分を除くと、540億ドル(0.6%)と黒字はほぼゼロだ。この減少の要因は、貿易収支よりも、サービス収支や所得収支の赤字幅の拡大に見られる外資依存のコストが増えてきているためだ。

他方で、直接投資の減少と埋蔵商品の販売を支えてきた香港経由の短期資金の流出が始まり、外資の流入が急速に細ってきている。金融危機懸念は別にしても、これが、中国の高成長時代の終焉(しゅうえん)を示していることだけは間違いないだろう。

(十字路 2014.4.3)